

## 無想録 八

### 鼎の軽重かなえ

三日にして愚者と見られ、一ヶ月にして平凡と評せられ、一年にして信ぜられ、十年にして重んぜらる。

三日にして喝采され、一ヶ月にして飽かれ、一年にして軽蔑され、十年にして忘れられる。

三日にして喝采されるは易し、一ヶ月にして飽かれざるはなお易し、一年にして信ぜられ、十年にしていよいよ重んぜられるに至って難中の難か。

世の軽薄才子、三日にして勝ちを得んとし、一ヶ月にして大成せんとし、一年にして重んぜられんとす。愚かなるかな。

### 努力

ただコツコツと黙々の努力をつづける。

働いても働いても誰も認めない。もつとやれ。

認められるどころか、誤解され非難される。しかも一貫の努力をつづける。

かかる一貫の努力なきものに、おおよそ大器があり得るか。

努力は実力を生む。実力なき世渡上手の偽宣伝デマゴーグは、裏面を知られるとともに、汝を塵芥ちりあふたに等しゆうす。

汝、汝の親に尊ばれたりや、汝の師匠に尊ばれたりや。汝、汝の兄弟に信頼されたりや、汝、汝の妻に尊敬されたりや、汝、汝の最も近きものに尊ばれたりや。

「他人汝を軽く扱う」と言うのか。

絶対に汝以外に汝を軽んずるものなし。

### 大乘腹

一国の大宰相の腰グラついて、国家グラつく。客観的認識足らざるがゆえに、断行なし。断行なきがゆえに信頼なし。信頼なきがゆえに自信なし。自信なきがゆえに、腰グラつく。道元禅師の「莫妄想」の一喝、七百年昔の時宗ならずとも、必要なること今日もまたしかり。一切を懐いて動ぜざる大乘腹、  
時いよいよ動乱、この腹なくして活発に地の自由境ありや。

### 五十年一章の詩

詩を書くは易し。

されど、血と肉と、生活をもつて一生一詩を成就するは難い。

### 自分の道を歩まぬもの

人が泣いている時、いつしよに泣かずにはおれないのは人情だ。

人が怒っている時、怒らないではおられないのは人情だ。

だが、涙にほだされたり、怒りに引込まれたりして、自分の生きてゆく道を失うことは、自ら死の道を求めることだ。感傷主義者に生きる道なし。

だが、怒るべき時に「カツ！」と怒り得ない人は、さらりと忘れ得ないものだ。長い愚痴にとらわれるのは「カツ！」と怒るよりも悪い。

笑う時、笑い得ず、泣く時、泣き得ず、言うべき時、言い得ず、行うべき時、行い得ない者は、愚痴の奴隷となる。自分の道を歩まぬ者の必然の相である。

## 磁石

青いものは青く光れ、赤いものは赤く光れ。青く出たり、赤く見せたり、白く化けたり、お前がぐらつけば周囲がぐらつく。強力な磁石が一個あれば、周囲の軟鉄はことごとく磁石になる。汝の腹が決定すれば、汝の周囲が決定する。

安価な平和主義のために、自分を周囲の色に合わす人間は、初め少しの間はたいへん好かれるが、近い内に周囲から敵を受け、やがて軽蔑され、嫌がられる。磁石には南北に一貫の力がある。

## 人生の機微

男が逃げると女がついてゆき、女が逃げると男がついてゆく。怒る夫の妻は従順で、甘い男の妻はかえって嬌慢不遜であり、放縦である。人生の機微ここにひそむか。セキスピアの「ジャジャ馬ならし」はここをつかんだものである。

## 長たるの器

日活映画池田富保の「英傑秀吉」を観る。

信長の前で、戦場における、長槍、短槍について便不便の議論があつた。槍術指南は短槍を主張し、秀吉は長槍を主張した。そこで信長は二人に貨すに、足軽三十人と三日の時日をもつてした。指南番は猛烈なる荒稽古をつけた。個人と個人との槍術を。しかし彼は、足軽どもを「馬鹿」と見た。そして口きたなく罵り叱り、打ちたたき蹴るので三日間には三十人ほとんど負傷者となり、ことごとくにおびえおそれる弱者の集団と化した。秀吉は、足軽三十人を人格として重んじ、礼を厚くし、個人の腕よりも、団体訓練を重んじた。彼は褒めた。彼の意志を徹底させた。特に夜は酒肴をもつてねぎらい、妻のお八重は兵の汗まで拭いてやった。三日後の双方の仕合の勝敗はすでに決している。

松下嘉兵衛の足軽から、やがて信長に仕え、ついに羽柴筑前守秀吉と任官出世した時、今川の没落ととも今は乞食よりもむごたらしく零落した嘉兵衛のアバラ屋を、筑前守の威儀を正して訪れた長い行列、華麗なるお籠、その中から嘉兵衛の前にあらわれたる秀吉は、昔の仲間姿であつた。その昔下郎の時、嘉兵衛が秀吉を教訓するたために打ちすえた。その時使つた、草履一足、つづれを身に、病にやつれた老人の前にならべ、「旦那様！藤吉郎にござりまする」昔を忘れぬ秀吉、下郎姿の筑前守、美しいカゴに嘉兵衛を乗せ、自らその側に従う秀吉の姿、涙せぬものがあるうか。

人を尊敬せざる者、尊敬されず。目下を遇するにこの慈愛をもつてし、師長に対するにこの報恩と礼をもつてす。これ長たる徳器か。

他人を善悪によつて裁く者は、自分をも善悪によつて苦しめ裁く。悪を善によつて滅ぼそうとする者は、仏の隣室にはいるが、しかし暗の世界、抽象分裂の死んだ生活であることに間違いはない。具体全一、一心金剛の生活、生命さながらに燃えてゆく自然法爾の天地に善悪はない。

### 清算

常に自己を清算しないものは弱い。清算するとは「あきらかにみる」ことである。「諦<sup>あきらめ</sup>」とは、法とわれとをはつきりとみることである。あきらかにみないから弱い。弱いから恐れる。一切を清算した底から新しい力強い新生がはじまる。

年末年始は自己清算にとつてのよい時である。